

北海道・アルバータ州高校生交換留学促進事業
受入学校事例集

Student
Exchange
Program



北海道教育庁学校教育局高校教育課

令和2年（2020年）4月

目 次

■ 事業概要	1
■ 学校における業務イメージ	2
■ 過去の受入事例	
1 受入体制について	3
2 本人等との事前連絡&事前準備	4～5
3 時間割の設定	5～6
4 課外活動・学校行事	7
5 日本語指導	7～9
6 英語授業における活用	9
7 配慮事項	9～10
8 過去参加校担当教員の感想	10
9 よくある質問	11～12
■ 参考例	
・ オリエンテーション資料①・②	
・ 誓約書	
・ 見学旅行参加承諾書	
・ インターンシップ参加承諾書	

<事業概要>

○ 概要

道と姉妹提携を結ぶカナダ・アルバータ州の高校生と、道立高校等生徒がパートナーを組み、お互いの家庭にホームステイしながらパートナーの高校に通い、授業や学校行事に参加する。

○ 募集人員

道立高校（第1～2学年）及び道立中等教育学校（第4～5学年）生徒 10名

○ 留学期間

- ・ 留学生受入 - 8月～10月（約2ヶ月間）
- ・ 生徒派遣 - 11月～1月（約2ヶ月間）

○ 受入学校の主な役割

※ アルバータ州側留学生＝ア州留学生、北海道側留学生＝留学生

<ア州留学生受入前>

- ・ ア州留学生に対し、学校生活等に関する事前連絡や助言を行う。
- ・ 受入家庭から、ア州留学生やその在籍する高校に対して照会するよう要望があった場合、ア州留学生やその在籍する高校と連絡を取るなど、適切に対応する。

<ア州留学生受入中>

- ・ ア州留学生に対し、授業、学校行事等への参加や、その他の学校生活について適切に対応する。
- ・ 必要に応じ、ア州留学生が在籍する高校やア州留学生の保護者等関係者との連絡調整、緊急対応を行う。
- ・ ア州留学生の日常生活に関わり、留学生やその保護者に指導及び助言を行う。
- ・ 北海道教育委員会の求めに応じ、ア州留学生の学校生活の状況や行動の様子等について報告する。

<留学生派遣前後及び派遣中>

- ・ 留学生及びその保護者に対し、留学前後における適切な指導・助言を行う。
- ・ 留学中における留学生やその保護者へのフォロー、留学先の高校やホームステイ先等関係者との連絡調整、緊急対応を行う。

○ 事業日程

※ 過去の標準的なスケジュール

時期	北海道	アルバータ州
～3月中旬		生徒募集
2月末～5月上旬	生徒募集	
5月末	参加者決定	
6月下旬	事前研修会（札幌市）	事前研修会（エドモントン市）
8月中旬	アルバータ州留学生出迎え 引率教員による学校訪問	アルバータ州出発
～10月中旬	アルバータ州留学生見送り	アルバータ州到着
11月中旬	北海道出発	北海道留学生出迎え 引率教員による学校訪問
～1月中旬	北海道到着	北海道留学生見送り
2月上旬	事業報告書・アンケート提出	

<学校における業務イメージ>

3月	事業実施通知	ポスター掲示 リーフレット配布	興味のある生徒へ呼びかけ HRや英語授業で周知
4月	校内選考 教育局選考	出願書類確認 校内面接選考	推薦書・ 受入計画書 作成 → 教育局へ報告
5月	参加者決定	生徒・保護者へ決定通知	
6月	事前研修会	事前研修会出席 校内受入体制構築	ア州留学生への事前連絡・確認等
7月	補助金交付決定	補助金申請書類提出対応	生徒・保護者の受入準備フォロー等
8月	ア州留学生到着 ア州教員学校訪問	ア州留学生受入開始	引率教員訪問対応
9月	補助金概算払		受入状況報告提出（中間） 補助金請求書類提出対応
10月	ア州留学生帰国	受入状況報告提出（最終）	生徒・保護者の留学準備フォロー等
11月	本道留学生出発 本道引率学校訪問	本道留学生派遣開始	生徒・保護者のフォロー等
12月			
1月	本道留学生帰国		補助金実績報告書類提出対応
2月	事業報告 補助金額の確定	事業報告書・アンケート作成	
3月		成果報告会等の実施	

< 過去の受入事例 >

1 受入体制について

- ◇ 担当教員一人に全てを任せるのではなく、前もって学校全体で複数の教員による受入の体制づくりを進め、役割分担を明確にすることが重要となります。
- ◇ ALT や養護教諭とも連携し、留学生の精神面のケアや、怪我や病気などの緊急時における対応ができる体制を構築しておくことも重要です。

受入の基本方針

[ケース1]

受入の基本方針は、留学生が日本文化を理解できるよう手助けしていこうということであったが、期間も2ヶ月ということで、ストレスなく楽しく学校生活を送れることを第一に考えた。

[ケース2]

できるだけ日本人生徒と同じような環境の中にいることが、日本の言語や文化に触れる近道であり、また基本的に教員に過度な負担がかからない形で実施することを原則としているため、留学生のために特別なプログラムを組むことはしておらず、今年もその方針を継続した。

校内の体制

[ケース1]

留学生受入に関しては、各学年主任と英語科教員からなる国際交流委員会という部署が主担当であるが、実際の仕事は英語科の教員が行う場合が多い。今回の留学プログラムに関しても、主に英語科の教員が担当した。

[ケース2]

留学委員会があるが、受入体制は整っていなかったため、この事業を機会に校内の各分掌の共通理解を図った。教務部は、留学する本校生徒の公欠を確認。生徒指導部は、制服や学校生活の細かな規則を確認。生徒会指導部は、部活動での協力と学校行事への参加、図書館での貸し出し等の確認を担当した。

[ケース3]

「受入概要」を作成して職員全体に周知徹底し、協力を求めた。特に委員会などの受入体制もないので、主に留学・国際交流担当者（教務内で1名）が、教頭、所属該当学年の主任、クラス担任、生徒指導担当などに、それぞれの関係する案件を相談しながら準備を進めた。

[ケース4]

留学委員会を立ち上げ、今後どのように進めていくか話し合った。メンバーは、教務部長、1～3年学年主任、英語科主任、該当担任の6名とし、ここで留学生の受入に関連した各行事の計画、時間割の検討を行った。

受入体制としては、一人の教員に負担がかからないよう、何人かで役割分担をする方向で考えた。特に、クラス担任の負担を減らすよう、英語科や英語に興味のある先生方による指導や、国語科による日本語指導の機会を設定した。また、生活上困っていることや分からないことの相談や話し相手として、ALTによるカウンセリングを実施した。その他理数科見学研修等の行事や、地域学習の引率などで多くの先生方の協力を得た。

[ケース5]

留学生が所属する学年におけるサポート体制を確立し、けがや病気時における養護教諭の対処について話し合った。文化の違いに対するストレスケアについては、ALTによるカウンセリングを実施した。また、英語科教員が、それぞれ1人当たり週1時間程度の日本語個別指導を実施した。

2 本人等との事前連絡&事前準備

- ◇ 学校や滞在地に関する情報を、可能な限り事前に留学生に提供しておくことで、その後の受入がスムーズに進みます。
- ◇ ホストファミリー同士では英語でのやり取りが難しい場合もあるため、学校側で事前に留学生らと連絡を取り合い、ホストファミリーにも情報提供することが大切です。
- ◇ 特に、修学旅行やインターンシップへの参加など保護者の同意や参加費の負担が必要な場合については、必ず来道前に連絡し、参加の意向などを確認する必要があります。
- ◇ 留学生のキャッシュカードを日本で使用できないトラブルが、例年報告されています。利用する予定の出金方法やカードの種類を事前に確認し、利用予定の最寄りの金融機関やコンビニエンスストア等で、引き出しが可能か確認しておくことでスムーズです。なお、同一金融機関でも、支店や、ATM の設置場所などにより出金の可否や限度額が異なる場合があるので注意が必要です。

留学生への事前連絡

[ケース1]

校則や授業中のマナー（飲食厳禁など）、ゴミの分別、清掃当番、登下校の手段と所要時間などを来道前にメールで知らせ、質問を受けた。また、制服着用の希望を聞き、卒業生などに呼びかけて、合うサイズの制服を探すことを考えたが、連絡し合う中で、留学記念に一式購入したいということになったため、価格を知らせ、ホストファミリーにもその旨を伝えて買いに行く時間を設けた。

[ケース2]

初めに行ったことはカナダ側留学生の保護者と連絡を取ることであった。受入期間中に2年次が見学旅行へ行くため、日程等の連絡、参加の意志確認と承諾、費用の支払方法の確認などをする必要があった。また、滞在期間中の行事予定や、学校生活、留学生のキャッシュカードで出金ができる金融機関の検索など、主に学校として必要と思われる事柄の確認や情報提供を行った。

[ケース3]

ミニスカートや化粧、装飾品は禁止ということをし、事前にALTから本人にメールで連絡をした。本人の希望により、当初は卒業生の制服を借りて着ていたが、サイズの問題で途中から私服（基本的には華美にならない程度の私服）となった。

[ケース4]

「ところ変わればルールも変わる」、「この学校にきたらこの学校のルールでやってもらいます」とあらかじめはっきり伝えておくことで、心構えもできてくるし、来校時にスムーズに適應できると考え、来道前に留学生と保護者、現地教員と連絡を密に取り合った。

<伝えたこと> ※ 保護者や現地教員にも、同じ内容をCCで送った。

- ・ 町の様子（札幌などと比べるとやや不便だが町はきれいで地域住民との交流もある、等）
- ・ 大まかな物価や地域の治安状況、未成年は法律で禁止されていること等
- ・ 学校のルールと持ち物（体操着・上靴や学習用品等、持ってくるものと日本で買えるもの）
- ・ 学校の時程、昼食のこと、掃除や役割、HRの様子、学校行事など（写真も送付）
- ・ 履修したい科目や部活動、現地の日本語の学習状況の確認
- ・ 英語ができる教員や町の人のことなど（町のALTなどがサポートできる旨）
- ・ 健康状態や既往症の確認（好き嫌い・アレルギー・町の病院の状況について）
- ・ お金の管理方法（銀行口座や国際キャッシュカードのATMの状況）

[ケース5]

受入実績のある管内他校から資料をもらい、またALTの協力を得ながら、自校の英語版ガイダンスを作成してメールで留学生に送り、学びたい科目や体験したい部活動などを確認した。同時に、家庭やパートナー同士では、LINEを利用し連絡を取り合っていた。

校内における事前準備

[ケース1]

留学生を受け入れるに当たって、「できるだけ日本語で、ゆっくりと、ですます調で話しかけてほしい」と、教員・生徒に協力を求めた。やり取りが困難な場合もあったようだが、最後は本人の積極性と、クラスの生徒や助けようとしてくれる教職員のお陰で、乗り越えることができた。

[ケース2]

服装・頭髮などのきまり、日課・時間割、部活動、ゴミの分別など学校生活で必要と思われるものを記載した「学校生活の手引き」を作成した。JRの通学定期券購入のための身分証明書と通学証明を用意した。また、インターンシップ参加のため、英文で作成した参加承諾書を事前にメールで送付し、来日する際に保護者と本人のサインをして持参してもらった。

3 時間割の設定

- ◇ 時間割は各学校の判断に委ねられていますが、留学生の希望を聞いたり、自習の時間を設けるなど、ゆとりのある時間割を組むことがポイントとなるようです。
- ◇ 実技科目を多く取り入れたり、他学年の授業に参加させるなど、パートナー以外の生徒とも多くのコミュニケーションを取れる機会を時間割に取り入れることで、留学生が学校生活にスムーズに順応する手助けとなるでしょう。

登校初日

[ケース1]

夏季休業明けの全校集会がなかったため、受入学年との交流がスムーズに図れるよう、登校初日に英語授業の一環として、学年集会の形式でウェルカムミーティングを行った。

[ケース2]

初日の最初の時間にガイダンスを設定し、時間割の希望や部活動への参加希望確認、時程、昼食、校則、服装についての説明、校舎案内、常駐ALTの紹介等を行った。

最初は全授業に参加させ、慣れてから時間割を調整したケース

[ケース1]

留学生はパートナーのクラスに所属し、当該クラスの時間割をベースとしたスケジュールに従って、授業に参加した。最初の1週間は基本的に午前中だけの受講とし、午後はカウンセリングと自習時間として学校に慣れてもらった。他学年の授業を含め様々な授業を体験してもらい、最終的に基本となる時間割を固めたのは3週間ほど経ってからであった。短期留学のため、できる限りクラスへの帰属意識が持てるよう、所属クラスの授業に多く参加してもらうことにした。

[ケース2]

基本的にはパートナーの授業に帯同してもらい、一週間ほど全ての授業を受けさせてから、受けたい授業を選択してもらった。その結果、数学、現代文、古典の授業は受けないことになったため、図書館を使用する自習時間として最低1日1時間を確保し、図書館ではインターネットを使えるように配慮した。

[ケース3]

一週間全ての授業に出てもらい、その後で、面談や日本語の勉強の時間に充てる時間をどうするか決めた。午前中は時間割どおりとし、午後の2時間はALTによる個人授業やカウンセリング、日本語のドリル学習を行った。

週毎に時間割を組んだケース

[ケース1]

パートナーが所属するクラスの時間割を基本にしつつも、60周年記念式典や定期考査、球技大会、秋休みなど様々な予定があったため、留学生の体調や希望も考慮しながら週毎に時間割を組んだ。

基本方針は「1日1時間ずつ自学自習、日本語学習の時間を設ける」、「体育・書道・美術・音楽・家庭科の実習は基本的に固定」、「内容を理解できるかどうかにかかわらず、初めの1～2週間は他学年も含めて様々な授業に参加し、日本の学校の雰囲気を経験させる」というものだった。

[ケース2]

英語・体育・家庭科・化学などを基本とし、その他の科目については内容的にも難しいということで、実技科目（音楽・書道・美術など）を中心に1週間毎のスケジュールを作成し、前の週の金曜日に配付して進めた。また、多くの先生方に「日本語学習」「日本史」「日本の文化・習慣」「見学旅行の心構え」など個別に指導してもらった。教科書等は、余っている教科書を貸した。科目によっては、ローマ字でまとめたプリント（日本史）を作成・配付した。

[ケース3]

毎週金曜日に次週の時間割を作成して渡した。作成に当たっては次の点に配慮した。

- ・音楽、情報処理、家庭科、芸術、体育など実習中心の科目を多く入れる。授業は日本語。
- ・理科や社会、数学なども「お試し」として受講させ、日本の授業を一通り体験する。
- ・情報系の授業の時間は本人がメールやチャットなどでカナダと連絡をとる時間とする。
- ・全校生徒と関われるよう1～3年生までのクラスに入れ、本校生徒に補助をさせる。
- ・英語の授業ではALTの補助や文化紹介を行う時間を設定し、ALTの仕事を経験してもらう。
- ・本人が各クラスで自国を紹介する時間を設定。

[ケース4]

本人の意向や理解度に応じて、毎週、時間割を再編成し、週末に翌週分を渡した。来校1日目から日誌を渡し、毎朝の登校時に、前日分を主担当の教員に提出させ、教員が確認後にメッセージを書いて、帰宅時まで返却するようにした。これにより、参加した授業に対する本人の意見等を確認し、時間割作成の参考とした。

その他のケース

[ケース1]

本校留学生の場合、チャレンジよりも慣れることの方が先決だったので、負担と思われるものはできる限り取り除いた。内容としては、毎日1～2時間の日本語（日本文化も含む）授業、家族にメールを送る時間、休息を兼ねて復習できる自習時間、パートナーがとっている授業で留学生にもできそうな音楽や体育、毎週2時間のカウンセリング（担当教員とALTによるもの）、異文化理解・実用英語（TTで多くの英語を使い、留学生にも内容が理解できる）を設定。LHRにも参加してもらった。

[ケース2]

留学生のために特別な時間割をあらかじめ設定することはなかったが、日常的に留学生との意志疎通を緊密に図り、彼らの要望があれば可能な限り柔軟に対応した。例えば、

- ア) 特定の教科・科目に興味を示せば、学年・クラスを問わずに該当授業を受けさせる。
- イ) 学習困難な授業がある場合には、他のクラスの授業を受けさせるか、別室で自習させる。
- ウ) 英語科教員の他学年・他クラスの授業に同行させ、英語授業に活用する。

[ケース3]

時間割作成にあたっては、次の点に配慮した。

- ・パートナーと同じ授業ばかりにせず、多くの生徒とかかわるように他学年の授業も入れる。
- ・英語の授業をできる限り入れないようにし、毎日1時間、日本語学習の自習時間を設ける。

4 課外活動・学校行事

- ◇ 部活動には正式に加入させるのではなく、希望する複数のものを体験的に参加させたり、マネージャーとして補助的に参加させることが多いようです。
- ◇ 体育祭や見学旅行などの学校行事は貴重な経験となるため、できるだけ参加させることが望ましいでしょう。
- ◇ 特に、自己負担費用の発生や宿泊が伴う行事に参加させる場合は、必ず留学生本人の希望だけでなく、留学生の保護者からも承諾を得た上で参加を決定するよう配慮してください。

部活動

[ケース1]

部活動は茶道（華道）・書道・柔道・剣道など、本人の希望を聞いていくつか参加させた。特に茶道は何度か参加し、講師の先生からお土産をいただくなど、交流を深めることができた。

[ケース2]

本人の希望により、剣道部と弓道部に掛け持ちで入部させ、一日おきに参加してもらった。

[ケース3]

パートナーがラグビー部に所属していたこともあり、マネージャーとして参加してもらった。留学期間中に行われた全道大会にも、本人の希望と顧問の了解により、参加することができた。

学校行事

[ケース1]

受入期間中に見学旅行があるので、参加希望の有無、参加費用や期間等を留学生の保護者へメールで確認し、校内体制を整えた。「見学旅行保護者同意書」は、署名したものの画像データを送ってもらい、「健康調査票」は留学生資料の健康状況欄を参考にしてそれに代えた。

[ケース2]

体育祭では比較的手軽に参加できる競技に出場させた。他の生徒と交友を深める良い機会となった。

5 日本語指導

- ◇ 留学生はカナダで日本語の指導を受けていますが、ほとんどの留学生は本格的に日本語を勉強し始めて1～2年目であり、日本語の能力も初歩的なレベルです。また、学習意欲も留学生によってバラツキがあるのが実態です。
- ◇ 1日に1～2時間を日本語指導に費やしている学校が多いようですが、担当教員だけでは負担となるため、複数の英語教員で指導に当たったり、他教科の教員やALTなどにも協力してもらうことが、負担軽減のカギとなります。

指導方法

[ケース1]

1日に1～2時間、日本語の授業を入れ、各学年の国際交流委員の先生や美術の先生、ALTなどから協力を得た。漢字のドリル練習、日本語テキストを使った授業、そして会話を中心とした授業に分かれ、留学生の知的好奇心を満たすような工夫をした。

[ケース2]

担任及び英語科教諭で週5時間、文法、漢字のほか、日本語の絵本、アニメ映像などを使用して様々な観点の授業を実施した。

また、アイヌ民族資料館、熱帯植物園、五稜郭タワー、市場などをフィールドトリップとして訪問し、北海道や日本の歴史、風土、人々の暮らしにも触れさせた。

[ケース3]

漢字の書き方や日本語表現などのテキストを利用しつつ、日常生活で気になった日本語や、会話の中で気付いた表現や文法などを取り上げて臨機応変に指導を行った。友人やホームステイ先の家族との会話で上手く言えなかった表現なども確認したことから、文化の違いを学ぶことにもつながった。

[ケース4]

生徒同士のコミュニケーションを主とする日本語学習からスタートを切ることとした。「正しい日本語」ではない場合もあるが、同年代のネイティブが使用するリアルな日常会話が学べるという利点があると考えた。

また、通じないフラストレーションが更なるモチベーションとなり、お互いの生徒にとって良い刺激になるものと考えた。留学期間中は生徒同士で日本語、英語の両方を交えた「サバイバル」に近い、楽しそうなコミュニケーションが続いた。

[ケース5]

国語科教員と英語科教員が「日本語1（会話・文法・語彙）」、「日本語2（表記・作文）」、「日本文化（実習）」の3科目を指導。また、学校行事とリンクさせ「日本文化」の時間で意図を説明した。町の教育委員会に依頼し、町のALTに随行して小中学校を訪問する日を作った（日本の学校事情を知るため）。高校生以外の子供と触れられたのは良かったようだ。

[ケース6]

英語科教員8名が授業の空き時間を使い、週1回ずつ、それぞれが用意した教材で、できる限り実用的な日本語を使う場面を作るという方針で指導を行った。日記を書かせたり、イラストを使った語句の習得教材、幼児向け絵本や漢字練習帳などを教材とした。

また、お互いの国の文化についてディスカッションを交わしたり、ALTを交えて日本語のロールプレイやゲームに取り組んだ。

使用教材

[ケース1]

テキスト「みんなの日本語」を使用しての表現の練習や漢字の学習をする以外に、筆ペンを使つての習字や、篆刻にも取り組んだ。

[ケース2]

事前研修で、カナダの高校生の日本語レベルは日本人の中学二年英語レベルだと聞いたので、書店で市販のテキストを選び、予め国際交流委員の先生方に見てもらった。先生によっては昔話（CDつき）や日本文化についての教材を用意してくれた。

[ケース3]

やさしい日本語の絵本「グリとグラ」を使用した。その中で、主語と述語動詞に線を引かせ、日本語と英語の違いを理解してもらおうとした。日本語の主語のない文、目的語の省略等、日本人にとっては簡単に理解できるようなことが大変難しかったようだ。日本語の意味を理解した後は、英語に翻訳させた。食文化の違いなども本を読んでいて発見した。

また、絵本だけではなく日常会話での質問にも答えるようにした。挨拶に関する質問では、カナダでは「元気ですか？(How are you?)」とよく友達同士で言うのに、日本ではあまり言わないのはなぜか。そのような質問が増えてきたため、留学生に日本語指導をした経験のある英語の先生に頼んで、文化・習慣に関する授業を週1回入れた。その結果、留学生はいろいろな情報をもらうことができ、担当教員としても全て一人で行うのではなく、様々な先生に声をかけ協力してもらうことによって、時間を有効に使うことができた。

[ケース4]

「小学校一年生漢字ドリル」を一冊用意してやらせたほか、英会話学習ムック（日本語訳も

あるもの) を使用して簡単な表現を教え、反復練習をさせた。図書室で簡単な絵本を探し読ませたりもした。

6 英語授業における活用

◇ 英語の授業中、留学生に英語で発表をしてもらったり、教員やALTの補助的な役割を与えている学校もあります。留学生にとっては、母国語で話す時間を確保することでストレスの軽減となり、他の生徒たちにとっては、同年代のネイティブの英語に触れられて、良い刺激になることが期待されます。

[ケース1]

留学生にALT役をしてもらって授業を行ったところ、ALTとは違った雰囲気の授業を受けることができ、生徒にはとても好評であった。また、生徒のライティングの添削も手伝ってもらったところ、留学生は全ての生徒にコメントを書くなど、積極的に行ってくれ、生徒は同年代のネイティブスピーカーから直にコメントをもらうことができ、大変喜んでいた。

[ケース2]

英語の時間を使用し、カナダの地元について、そして日本に来てから感じた両国の違いなどについてプレゼンテーションをしてもらった。所属学年の2年生では2クラスずつ3回、1年生ではより質疑応答がしやすいよう、1クラスずつ6回行った。回数を追う毎に留学生のプレゼンテーションは上達し、質疑応答も活発に行われ、実り多い時間となった。

7 配慮事項

◇ 慣れない環境でのホームステイ、学校生活で、ストレスを抱えて悩んでいたり、体調を崩してしまう留学生もいます。可能な限り英語で素直な気持ちを打ち明けられる時間を定期的に設け、心のケアに配慮することが重要です。

[ケース1]

ALTにパートナーとの生活や学校での悩みを聞いてもらうカウンセリングの時間を設けるなど、英語でほっとした時間を過ごせるような配慮をした。また、留学生にトラブルがあった際、ALTが積極的に相談にのってくれたが、立場が近く英語でコミュニケーションを心置きなく取れるため、留学生にとってとても良かった。

[ケース2]

知らない土地に来てのホームシックや、留学生ということでの他の生徒から注目される事に対するプレッシャーも感じていたようだった。英語科の教員や週1回来校するALTを中心にカウンセリングを実施したり、毎日交換ノートのやり取りをして、普段思っている事を聞いたり、悩みごとの相談なども行いました。

[ケース3]

教員が説明してしまえばすぐ済むことを、「我慢して」あえて言わず、生徒同士の間で解決するような環境を作った。

[ケース4]

特別授業は国際交流室で行なったが、英語を使えないことは本校留学生にとって大きなストレスであったようなので、時折英語準備室のALTに話をしに行くことがあった。そのためか日本語はあまり上達しなかったが、ストレスを溜めて精神的に持たなくなるよりもいいと判断し、あまり英語の使用を禁止することはしなかった。

[ケース5]

座席表や清掃当番表、留学生の座席やロッカーには、留学生の名前をはっきり分かるように入れた。自分からはなかなか話をしない留学生がクラス生徒と仲良くなれるよう、生徒の何人かを誘い、生活体験を兼ねて、留学生の大好きな娯楽施設や食事に連れ出すなど、受入学級の先生にもいろいろと協力してもらった。

[ケース6]

英語科担当教員全員で、指導した内容や触れた話題などをノートに簡単に記録して引き継いでいくことで、それまでの指導内容の確認や、現在の留学生の学習状況について共通理解を持つことができた。

8 過去参加校担当教員の感想

[ケース1]

本事業に参加したことで、生徒のみならず、学校全体が活性化することとなった。受入体制が整っていなかった本校にとっては、何から何まで確認、摺り合わせの作業が必要であったが、今後、着実に国際理解教育を進めて行くための第一歩になった。

[ケース2]

留学生と日本語で対話しながらも、必要な説明には英語を使用する場面もあり、生徒の英語力向上への意識が高まった。また、異文化への関心が以前よりも強くなり、別の交換留学事業へ申し込んだり、自費での短期留学をしたり、海外への大学進学を決めた生徒も出てきた。

[ケース3]

受入校にとっても日常とは違った仕事が増えるため困難なことが多いと思うが、それに見合う成果が生徒のみならず教職員も得られるため、できれば来年もこの事業に参加できればと思う。

[ケース4]

パートナー同士で上手くいかないことがあれば、すかさず周囲の友人が留学生に話しかけ、ストレスの軽減に努める様子が見られた。留学生との会話はほとんどが英語だったため、周囲の生徒は英語を話さなければならず、それにより結果的にはあるが英語への興味や関心を深めた生徒もいるようだ。自分とは異なる文化背景を持つ同世代の生徒と関わることは、大変意義のあることだと感じる。

[ケース5]

事前研修会における教員同士の話し合いの中で、「日本語を教える」ということが受入のハードルになっていると感じた。2ヶ月の滞在中に教員が専門でない日本語指導をする時間は取りにくい。そこは生徒同士の交流に任せようと割り切った方が、英語科以外の先生方にも、気持ち良く受入に協力してもらえるのではないかと感じた。

[ケース6]

留学するには、双方とも「何のために留学するのか」という目的意識をしっかりと持っていることが不可欠だと考える。流暢な日本語力と、ある意味日本人よりも日本人らしい精神までも学んで来道する留学生もいれば、仮名の読み書き以外の日本語力を持たぬまま来道して、日本語をほとんど話さずに過ごす留学生もいる。

来道して1か月半ほど経った頃の面談で、本人は日本語に自信がなく、友人を増やしたくてもなかなか話しかけづらいと打ち明けていた。非常に単純なことなのだが、日本語と英語を併用すれば良いということを面談の中で自ら思い付き、突然明るい表情に変わったのは印象的な場面であった。日本語の習熟よりも、日本文化に入り込むことの方が大切だと思われるこの交換留学においては、非常に有効なアイデアだったろう。

9 よくある質問

Q 1	本校には制服がありますが、留学生の分も用意するべきでしょうか。
A 1	<p>留学生本人の希望を踏まえ、各学校の判断で対応して差し支えありません。</p> <p><着用させる場合> 学校にある予備を貸し出す、保護者の協力を得て卒業生の制服を貸し出す等</p> <p><着用させない場合> 制服の写真や服装に係る校内規程を事前にメールで情報提供し、規程に違反しない衣服を用意してもらう等</p>
Q 2	同性のペアを想定していましたが、男女のペアになりました。どのようにパートナーを決定しているのでしょうか。
A 2	<p>基本的には同性のペアとなるよう、出願書の内容をもとに、北海道教育庁及びアルバータ州教育省が協議し、双方の参加者の同意を得た上で決定しています。</p> <p>しかしここ数年は、北海道側とアルバータ州側とで男女の人数が異なるため、出願書の中に、パートナーの性別を問う項目を設けています。ペアを組むにあたっては、この項目を最優先するため、異性は不可との申し出があった場合は、異性の生徒とペアになることはありません。また、異性ペアとなる場合も、提供できる個室の有無、同居する家族の年齢・性別や、性格・趣味趣向の共通点等も考慮し、総合的な観点からペアを決定することとしています。</p>
Q 3	部活動の遠征に留学生と一緒にいっても良いのでしょうか。また、費用負担はどのようにすれば良いのでしょうか。
A 3	<p>留学生の遠征参加を妨げるようなルールはありませんので、受入学校側の対応可否と、留学生側の希望有無を確認の上、学校の判断で対応して差し支えありません。</p> <p>また、遠征に係る旅費や大会参加費については、留学生（の家族）の負担となります。</p> <p><校内で確認する事項></p> <ul style="list-style-type: none"> ・留学生が同行しても問題ないか、部活動の顧問や部員の協力を得られるか等 <p><留学生に確認する事項></p> <ul style="list-style-type: none"> ・費用は自己負担となるが参加を希望するか ・行かない場合は数日間パートナーと離れることになるが問題ないか等 <p>※ 他にも見学旅行、芸術鑑賞、スポーツ観戦等の課外活動については、学校の授業として計画されているものであっても、日常生活の範囲外とみなしてその費用を自己負担としています。日本側の学生がアルバータへ留学した際の課外活動についても、同様の扱いとなります。</p> <p>※ 不参加の場合は、パートナー不在の間、受入家庭で留学生が孤立することのないよう、受入家庭の家族に協力を仰ぐ必要があります。アルバータ州側からも配慮を要請されているため、必ず事前に受入家庭と情報共有して対応を検討するようお願いいたします。</p>
Q 4	受入中に見学旅行があり、留学生は参加を希望していますが、異性のパートナーなので、男女別で過ごす時間の対応等をどのようにすれば良いのでしょうか。
A 4	<p>過去の男女ペアの事例を見ますと、通常の学校生活においても常にパートナーと一緒にではなく、休憩時間等は他の同性の生徒たちと過ごす時間も多かったようです。見学旅行の実施期間は、滞在期間の終盤（9月下旬～10月上旬）であることが比較的多いことから、パートナー以外の生徒たちとの交友関係も築けていることが期待されます。</p> <p>しかし、留学生の状況によっては、見学旅行中にパートナーの代わりとして、特定の同性の生徒をサポートにつけるなど、留学生が孤立するような状況にならないよう配慮願います。</p>

Q 5	過去に留学生を受け入れた際、留学生に「独立行政法人日本スポーツ振興センター災害共済給付」に加入してもらいましたが、必ず加入させる必要があるでしょうか。
A 5	留学生が加入している海外旅行保険により、同等の補償内容がカバーされているため、加入させる必要はありません。
Q 6	日本語指導にはどのような教材を使うことが多いのでしょうか。また、教材購入に係る予算の措置はありますか。
A 6	<p><実際に使用した教材の例> ※ 過去の事業報告書やアンケートから</p> <ul style="list-style-type: none"> ・文化庁文化部国語課の日本語教育コンテンツ共有システム「NEWS」 http://www.nihongo-ews.jp/ ・連語を整理したテキスト：『ペアで覚えるいろいろなことば』（武蔵野書院） ・初級日本語テキスト：『Japanese for Young People Student Book』シリーズ、 『Japanese for Busy People』シリーズ（公益社団法人国際日本語普及協会） ・小学生向けの漢字ドリル ・絵本、漫画、アニメ、映画 <p>なお、テキスト等の購入に当たっては、高校教育課による予算の措置はありませんが、学校長の判断により道費での執行が可能です。</p>